ヘルタ・ミュラーの文学をめぐって

九州大学大学院人文科学研究院・准教授 小黒康正

周辺から生まれた饒舌な「沈黙」

総じて現代の優れた文学は、新しいポエジー言語を伴いながら、「周辺」から立ち上がってくる。その意味を我々に改めて問うのが、本年度のノーベル文学賞受賞が決まったヘルタ・ミュラーの文学であろう。

ドイツ文学史を繙くと、「周辺」の作家が新しい文学の中心を担うことは少なくない。ハウプトマン（シュレージエン）しかり、カフカ（プラハ）しかり、ツエラーン（ガリツィア）しかり。「周辺」をめぐる逆転の構図は、いまや世界的潮流になっている越境・移民文学への関心の高まりと相まって、現代ドイツ文学においても著しい。かつてノーベル文学賞にトーマス・マン（1929年）、ヘルマン・ヘッセ（1946年）、ハインリヒ・ベル（1972年）等、「ドイツ」の作家が名を連ねたが、いまやエリアス・カネッティ（1981年、ブルガリア）とギュンター・グラス（1999年、バルト海の港町ダンチヒ）といった「ドイツ語圏辺境」の作家が新たに加わる。また、「周辺」の問題をジェンダー的観点から捉えるならば、男性的原理によって周辺化され続けてきた女性の書き手として、ネリー・ザックス（1966年）とエルフリーデ・イェリネク（2004年）がノーベル文学賞の栄に輝いたことも忘れてはならない。同賞が1901年に設けられて以来、ドイツ語圏から13人目の、女性としては12番目の受賞者であるヘルタ・ミュラー（2009年）こそ、二重の意味での「周辺」作家である。

◇◇

1953年、ミュラーはルーマニアのバナート地方に生まれた。そこは、18世紀にオーストリアの国家的要請を受けてドイツ・シュヴァーベン地方の人々が入植した土地である。ミュラーはこうした「周辺」の地で、1987年にベルリンに移住するまでチャウシェスクの独裁政治がもたらす恐怖に曝され続けた。処女作『澱み』（1984年）は、ドイツ系少数民族の村社会に渦巻く因習や権威主義や暴力を子供の眼差しで描く「反牧歌」である。第一長編『狙われたキツネ』（1992年、山本浩司訳・三修社刊＝1997年）では、秘密警察と相互密告に苦しむルーマニア80年代の日常が、不気味なメールヒェンと化す。また、最新の長編『息ブランコ』（2009年）は、ドイツ系ルーマニア人が第2次世界大戦時に旧ソ連で被った強制労働という政治的タブーを扱う。総じてミュラー文学は多民族の縮図の中でマイノリティーが陥った苦難を見事に証言する。

ただし、過酷な現実を書き連ねるだけでは文学は成り立たない。ミュラーは言う、「多くの人にとって私の本は証言です。しかし私は書いている自分が証言者であると感ずることはありません。私が書くことを学んだのは沈黙からです。そこから書くことが始まりました」と。『狙われたキツネ』ではルーマニアの三色旗が「赤貧の赤、沈黙を表す黄色、監視の青」として示され、長編『心の獣』（1994年）は「僕らは沈黙すれば腹が立つし、喋ればとんだお笑いさ」という文言で始まり終わる。ミュラー文学における「沈黙」とは、独裁政治によって強いられた寡黙や秘密警察に対する黙秘だけではない。それは、過度な恐怖によって現実が歪められた結果、加害者と被害者、自殺と他殺、光と闇、自然と人間、これらの境界が判別しがたくなったいわば「言語」を絶する状況である。総じてドイツ現代文学は言語ならざる「沈黙」にことばを与えようとする矛盾を意図的に犯す。ミュラーの場合、コラージュの技法を巧みに用い、エピソードを断片化し、ことばを切りつめることで、饒舌な「沈黙」を現出させる。しかもそうした「沈黙」には倦怠と沈思による「深い憂い」が伴う。芸術の霊感源と称されてきたメランコリーが、古代ローマの農耕神サトゥルヌスや時の神クロノスと深く関わる土星的資質の知的衝動であることを忘れてはならない。ミュラー文学には、農地開拓のために辺境に移住した人々の言語ならざる「深い憂い」が、時を経て沈殿し続けている。

ノーベル文学賞受賞が決まったドイツの女性作家ヘルタ・ミュラーさん（AP＝共同）

おぐろ・やすまさ 九州大学大学院人文科学研究院准教授。専門はドイツ文学。1964年、北海道小樽市生まれ。同大学院文学研究科博士課程修了。ミュンヘン大学日本センター講師、九州大学文学部助手を経て、現職。著書に「黙示録を夢みるとき―トーマス・マンとアレゴリー」。

文化

ファクス:092(711)6243
メール:bunka@nishinippon.co.jp

と退屈なこのナルシシストとしゃべりだしたら、ひっきょう厄介だし、うるさくてとても同居は無理なのではないかと自信をうしなう。

犬にかぎらず生きとし生けるものに、私はたぶん能弁より寡黙をのぞんでいるようだ。自身にたいしても雄弁よりはむしろ訥弁を、饒舌よりはすべからく沈黙をえらぶべし、といい聞てにやさされる能弁でクッドルッキングな若手候補者というのもなんだか苦手だ。ごくごくまれにおそろしく口下手の医師や店員、お役人にであったりすると、立て板に水ではないという、ただそれだけの理由でじわっと情味を感じたりするのだが、これは過ぎたおもいこみか。

だれしも思考のめぐりになかなか言葉が追いついていかない削謐な空隙であり、今日のようにやかましく中身のない饒舌社会にあってはいっそ新鮮で惹かれる。言葉と言葉のあいだにはさまれてあるそうした沈黙の湖の青みにこそ、じつは表現の玄奥が秘められているのではないか。沈潜する思念とそこからどうしても乖離して浮いてしまう言葉のあいだのたわんだ空間には、よくよく自省するならば、そのまま発語しそびれて、表現衝動と表現放棄（断念）のあいだの闇に宙づりになっても言葉ならぬ意味不明の訥がき、言葉ならぬ意味不明の訥音を苦しげにもらす、数秒ある いは数分間。それこそが言葉が固有の影としてひきずる負い目にも似た知であり思想ではないのか…と、ぐずぐずおもうのである。宙づりのあいだ、彼また は彼女の声は吸気音すなわちあくびにすぎないのだが、饒舌な企画とどこかツルツルした常套句。五輪招致話からは終り、悲しみの吸気音が聞こえない。聞こえるわけもない。

犬のグルグルは、そもそも言葉をもたないのだから、訥音とはいいかねる。永遠に語らぬ者のみが表わしうる悲しみの色が眼ににじむだけだ。

（へんみ・よう＝作家）

※随時掲載

夢をつかむ

風虫

イタリアでは70年代に、歴史的な都市を保存するだけでなく、建物や街区全体を修復再生する事業をおおいに進め、快適でお洒落に住めるようになった。80年代には、古い街の魅力がぐっと高まり、人気を集めた。

それと同時に、イタリア人の関心は、都市からさらに田園に広がった。そこに登場したのが「風景」のキーワード。イタリア語ではパエサッジョという。面白いことに、都市よりもその外に広がる風景の価値が地域起こしの大きな武器になりつつあるイタリアの動きは、注目に値する。

近年では、「美しい風景の中でつくられたワインは美味しい」という感性さえ生まれている。オルチャ渓谷の農村が元気になった。農業製品はイメージアップし、付加価値がつく。農地の不動産価値も上がっているという。

（法政大学教授。カットは、なかだえりさん）

昨年9月に磁力装置の事故を起こした欧州原子核研究機構の加速器LHCが復旧、今月から陽子衝突の準備に入った。計画では、11月から4週間かけて陽子を加速し、12月中旬には3・5テラ電子ボルトという世界最高のエネルギーで陽子同士を衝突させる。衝突でばらばらになった陽子の構成物質を調べ、これまで理論上の存在であったクォークを確認する。

クォークは物質の基本素材であり、宇宙を形成する元でもある。その性質や働きが分かれば、物質や宇宙の成り立ちが、具体的に解明されることになる。人類が長年問い続けてきた「私（世界）とは何か」に物理的な答えが出る日も期待できる。

加速器によるこのような実験は、日本でも行われている。その一つ、日本原子力研究開発機構と高エネルギー加速器機構が茨城県東海村に建設した大強度陽子加速器J-PARCは、昨年12月から稼働している。

また、ノーベル賞を受けた小柴昌俊さんの呼び掛けで、昨年2月には先端基礎科学次世代加速器研究会が設立され、各地で高校生や大学生を対象にシンポジウムを開いている。九州でも11月8日、福岡市・天神の西鉄ホールで「宇宙に挑む日本の貢献」が開かれる。〝最先端の力で挑む宇宙の謎〟〝ビッグバンを再現する究極の加速器〟などの講演が予定されている。

極小の物質が広大な宇宙の解明につながるように、若い頭脳が先端科学を切り開くことが、小柴さんの願いでもあろう。

（四紀）